

いまや日本で絶大な人気を誇るピアニストがエディ・ヒギンズである。CDの売り上げで、ここ数年トップかその周辺に位置している彼は、日本のレコード会社、すなわち本作をリリースしているヴィーナス・レコードの手によって見事な復活を遂げたと言ってい

ヒギンズは今年（2003年）で71歳になったヴェテランだ。生まれはマサチューセッツ州のケンブリッジだが、シカゴのノース・ウエスタン音楽院で学んだことから、同地で本格的な演奏活動に入っている。

これまでに彼が脚光を浴びたと言えバ、1960年代に入って、シカゴを本拠地にしているヴィー・ジェイ・レーベルから優れたリーダー作を発表したことぐらいのものだ。その後もアトランティックでアルバムを発表するなどしていたが、全国的な名声を獲得するには至らなかった。

そういうわけで、長い間、ヒギンズは通好みのピアニスト、あるいは隠れた名手として知るひとぞ知る存在に甘んじてきた。そして、1997年に『魅せられし心』がヴィーナスからの1作目として発表される。これが思わぬ大ベストセラーを記録し、ヒギンズの人気と注目度が一躍高まることになった。

以後は、『アゲイン』、『愛の語らい〜ジョビン作品集』、『ベッドで煙草はよくないわ』、『魅惑のとりこ』、『煙が目にしみる』、『懐かしのストックホルム』、『マイ・フリーッシュ・ハート』と、年に1〜2作の快調なペースでアルバムを発表し、日本はもとよりアメリカでも人気を不動のものにしてきた。

今回は、これらの作品（『愛の語らい〜ジョビン作品集』からは選ばれていないが）からの10曲に、未発表演奏の3曲を加えたベスト盤の登場である。ヒギンズの魅力がコンパクトに纏められたこのアルバムによって、彼のファンがさらに増えることは間違いない。

■曲目紹介

1．虹の彼方に

ジュディ・ガーランドを一躍銀幕の大スターにした1939年公開のミュージカル映画『オズの魔法使い』の主題歌で、同年のアカデミー主題歌賞を獲得した。彼女はこの曲を自身のショウのテーマ曲にして、生涯歌い続けたことでも知られている。ヒギンズの演奏は『懐かしのストックホルム』に収録されていたもので、落ちついた雰囲気的美しいバラードになっている。

2．縁は異なもの

生粋のジャズ・シンガーというより、ブルース・シンガー的な立場からジャズも歌っていたのがダイナ・ワシントンだ。彼女の場合、朗々とした響きと女性らしさをほどよくミックスさせた唱法が大きな個性になっていた。日・米のコマーシャルにも使われるなど、ダイナの代表的なレパートリーとして知られているのが、もともとはラテン・ナンバーとしてヒットしたこの曲だ。それがヒギンズのトリオにかかると、ミディアム・スイングのご機嫌なナンバーになる。ちょっとしたブルーギーな表現も心憎い。これは『魅惑のとりこ』で紹介された演奏だ。

3．煙が目にしみる

1933年に公開されたミュージカル『ロバータ』は、作詞をオットー・ハーバック、作曲をジェローム・カーンという当代の人気コンビが担当して大好評を博した。そのミュージカルから誕生したのがふたつの名バラードである。ひとつは、のちに黒人コーラス・グループのザ・プラターズがポピュラー・ヒットさせた「煙が目にしみる」で、もうひとつがビリー・ホリデイの絶唱で有名な「イエスタデイズ」だ。



その前者が、ヒギンズのトリオとテナー奏者のスコット・ハミルトンが共演したカルテットによってしっかりと演奏される。これは2001年に録音され、翌年リリースされた『煙が目にしみる』からの1曲だ。

4．ムーンライト・ピカムズ・ユー

2002年に発表された『懐かしのストックホルム』で冒頭を飾ったナンバー。このアルバムは、ヒギンズに演奏してもらいたい曲をスイングジャーナル誌の読者投票で選び、そのトップ25から14曲を収録したものだ。21位となったこの曲では、グレン・ミラーの「ムーンライト・セレナーデ」の一節が最初に盛り込まれ、粹でスイングーなナンバーに仕上がっている。

5．時のたつまま

1931年のレビュー『エヴリバディーズ・ウェルカム』のために書かれ、映画『カサブランカ』のテーマに使われて世界的なヒットとなったこの曲も、ヒギンズのピアノにぴったりの選曲である。『魅惑のとりこ』で発表されて以来、程やかなタッチがファンをとりこにしてきた。まさに収録アルバムのタイトル通りで、ピアニストとして、表現者として、彼の真骨頂が示されたトラックだ。

6．あなたのことはわからない

ヒギンズは隠れた名曲を紹介する名手としても注目しておきたい。そのことを如実に物語っているのがこの選曲だ。デューク・エリントンには数多くのヒット曲がある。その影に隠れて、まったく目立たない存在で終わっているのが、思索的な響きのメロディを持つこの曲だ。ヒギンズはジョン・ビザレリのギターとジェイ・レオンハートのベースという、ドラムレスのトリオで淡々とピアノを綴っていく。情感を抑えた分、聴き手のイマジネーションが豊かになるといったタイプの演奏である。これは、『ベッドで煙草はよくないわ』からの1曲だ。

7．テンダリー

1946年にトランベッターのジャック・ローレンス（作詞）がウォルター・グロス（作曲）と組んで発表したナンバー。同年にローレンスが吹き込んだレコードで最初のヒットを記録した。続いて1952年にローズマリー・クルーニーの歌が売れに売れ、このミリオン・ヒットに

よって不動の人気を獲得している。最新作の『マイ・フリーッシュ・ハート』で未発表のままに残されていたこの演奏は、ヒギンズとスコット・ハミルトンのデュオによるもので、原曲に忠実な味わい深い美しさが印象的だ。

8．アゲイン

『懐かしのストックホルム』でもとり上げられていたが、こちらは1999年の作品『アゲイン』のタイトル・トラックとなった演奏。アイダ・ルビノ主演の映画『ロード・ハウス』で発表されたナンバーである。ルビノの歌が評判を呼んでスタンダードの仲間入りを果たしたこの曲を、ヒギンズが瀟洒なタッチで気持ちよさそうに綴っていく。

9．ニューヨークの秋

1934年のレビュー『サムズ・アップ』のためにヴァーノン・デュークが発表した美しいメロディを、ヒギンズのトリオが独特のスタイルで料理してみせる。『煙が目にしみる』のレコーディングで残された未発表演奏だが、メンバーの寛いだプレイからはニューヨークの紅葉が目に浮かぶようだ。

10．ナウ・プリーズ・ドント・クライ・ビューティフル・エディス

『アゲイン』の中でとり上げられていた重厚な響きのテーマを持ったナンバー。レイ・ドラモンドとベン・ライリーを従えたヒギンズのトリオが、情感も豊かに、かつスイングーに演奏してみせる。

11．あなたは恋を知らない

1941年に公開された映画『凸凹空中の巻』の主題歌で、ドン・レイ作詞、ジーン・デ・ボール作曲によるラブ・バラード。歌詞が失った恋人へのモノログといったスタイルになっており、それだけに表現力に自信のある歌手やプレイヤーにとっては腕の見せどころとも言える曲だ。『煙が目にしみる』で発表されたこのトラックでは、テナー・サックスのスコット・ハミルトンが哀愁のこもったプレイで聴くものの心を掴む。テーマ・パートでは、ブリッジの部分を受け持つヒギンズのプレイが魅力的だ。

12．サムワン・トゥ・ウォッチ・オーバー・ミー

1926年からロングランを続けたミュージカル『オーケー！』のためにガーシュイン兄弟が書いたナンバー。それを『魅せられし心』でヒギンズがとり上げた。無伴奏でテーマが演奏され、ソロ・パートからリズムがついて、ややテンポが速くなる。とは言っても、バラードの範疇に入れていいようなパフォーマンスは、ひたすらロマンチックな響きを追求したものだ。切なさを表現するかのような高音と、翳りを帯びたブルース・フィーリング。それらがほどよい隠し味となって、演奏を魅力一杯のものにしていく。エンディングにガーシュインの代表曲のひとつ「ラブソディ・イン・ブルー」の一節を用いたところも洒落ている。

13．ザ・ピーコックス

白人ピアニストのジミー・ロウルズは、作・編曲者としても1940年代から活動を始め、その後は1950年代に巻き起こったウエスト・コースト・ジャズのムーヴメントで重要な役割を担った。その彼とスタン・ゲッツが1975年の作品『ザ・ピーコックス』（ソニー）で久々に共演を果たす。その中でもっとも印象的な曲となったのが、ロウルズが書いたこのナンバーだ。『懐かしのストックホルム』セッションで未発表だったテイクだが、お蔵入りさせておくには惜しい内容である。

[[c)WINGS03102057：小川隆夫/TAKAO OGAWA]